

## ボート

10月9日と10日の両日、1年生を対象としたボート教室が行われた。ぬけるような青空のもと、端艇部員の指導を受けながら、全員が初めてのオールを手にし、清流子吉川を身近に感じるひとときを過ごした。

「本荘はボートの町」という言葉をよく耳にする。それは、市民や行政の取り組みがあったことはもちろん、四季を通じて水量豊かにゆったりと流れる子吉川のおかげである。また同時に、本荘高校端艇部の活躍があったから、と言っても過言ではない。

端艇部は、明治35年、学校創立と同時に設立された。漁のためではなく、スポーツとして舟を漕ぐ姿は、当時の人々の目には西洋文化の象徴として映ったかもしれない。大正13年、隅田川における第1回神宮レースに出場以来9年目にして、全国優勝を成し遂げている。以来、全国大会での優勝は男女合わせて16回になる。優勝の際に行われる「提灯行列」は、地元の人々に自信と希望を与えてきた。

今ではボート「教室」となっているが、創立3年目の明治37年から、校内ボート「競技大会」が行われた。当時はほぼ全員が、選手として校内競技に参加していた。本荘中学生なら、誰もが一度はボート競技の選手となっていたのである。

私が本荘高校在学中も、各クラス対抗の校内ボート競技大会が、10月にあった。練習で同級生の端艇部員にボートに乗せてもらった時の、新鮮な感覚は今でも忘れられない。水面との近い距離、子吉川のにおい、水面すれすれから見た陸の風景。中でも印象に残っているのが、羽越線鉄橋よりもさらに上流で見た新雪の鳥海山。

艇庫に戻って来たとき、「自分は本荘高校生なんだ」というアイデンティティが、はっきりと芽生えた。

